

# 香川県仲多度郡琴平町新地遊廓周辺の復原

前島裕美

## 1. はじめに

香川県仲多度郡琴平町には、山腹の社殿までの石段の数の多さで有名な金刀比羅宮、通称「こんぴらさん」がある。麓のきれいに整備された石畳の表参道には参詣客が常に往来し、それに面して大型旅館・ホテルが立ち並ぶ神明町、そして参詣客向けの土産物店が並ぶ内町・坂町がある。「盛り場」を、一般的に「商店街・歓楽街を含め、盛っている場所」と捉えれば、現在の琴平で盛り場と言えるのは、これらの場所である。

一方、表参道をそって裏小路に入ると、ソーブランドやスナックが散在する一角が出現する。ここを栄町といい、今でこそ人通りは少ないが、数十年前までは琴平屈指の盛り場として賑わいを誇り、現在の表参道沿いをすら凌駕していたという。賑わいの理由は、参詣客の目当ての一つである遊廓があったからである。本稿は、その盛衰を昭和初期から復原することを目的とするが、一般にこのような社会の裏の記録は残されにくい。以下の記載において、注を付したものは文献資料に基づくが、それ以外は筆者の聞き取りによるものである。

## 2. 新地遊廓のはじまり

古い門前町としての琴平の遊廓は金山寺町（現在の通町・小松町）にあり、茶屋・賭場・富くじ小屋・芝居小屋なども立ち並ぶ遊興の地であった。しかし、一般の商店や旅館との混在は風俗上有害であるという理由から<sup>2)</sup>、遊廓は明治33（1900）年に現在の栄町に移転され、新地と呼ばれることになった。

金山寺町は色街という性格は失ったものの、「琴検」と通称された芸妓検番が置かれ、娯楽の地として賑わいを続けた。明治末期には、パノラ

マの跡地に水族館が建てられ、活動写真館も開館して朝から晩まで「白虎隊」を映写して大入りを博した<sup>3)</sup>。

## 3. 戦前の新地遊廓（図1）

新地遊廓の北に隣接する場所は、現在のコトデン琴平駅横の高燈籠の前にあたり、いまは食堂や観光案内所が立ち並んでいる。戦前は約2000坪の空地があり、凧揚げや盆踊りが催されていた。昭和10年頃、ここで矢野サーカスが1カ月ぐらい興行し<sup>4)</sup>、大相撲が来たこともあるという。この頃琴平では旧国鉄以外に琴電、琴参（昭和38年

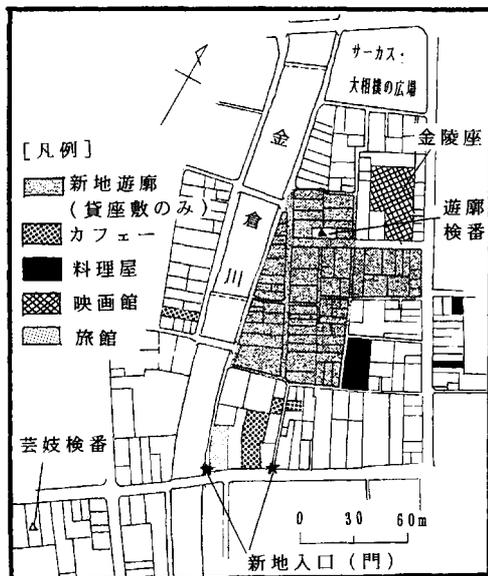


図1 昭和初期の栄町周辺

図1～4はゼンリン住宅地図【仲多度郡】（2000）をベースマップとして使用。なお、図1～2は「町史ことひら3 近世・現代 通史編」、町史ことひら4 民俗・史跡・碑・文化財・人物編」、「こんぴら夜咄」及び聞き取り調査を基に作成。ただし、現時点の調査で明らかになっている施設のみ記入。

廃線), 琴急 (昭和19年廃線) 各線の駅も相次いで完成し, カフェ, バー, ダンスホールも姿を現した<sup>9)</sup>。

当時琴平には2軒の映画館があった。1軒は江戸時代から続く金毘羅大芝居の小屋・金丸座を引き継いだものである。もう1軒は栄町にあり新地遊廓に隣接していた金陵座である。金陵座は明治末期に外観を金丸座に模して建てられた劇場風映画館であった<sup>10)</sup>。

新地内はほとんどが貸座敷で占められ, その周辺には旅館, 料亭, カフェが立ち並んでいた。これらを利用するのは主に参詣客であった。旅館や料亭には, 上述の「琴検」から芸者達が御座敷に通ってきていたという。カフェの蓄音器から流行歌が流れ, 女給達が外で熱心に客の呼び込みをし, 客は酒を飲んで歌ったり, ダンスホールほど広くない店内の机の隙間でダンスを踊った。

しかし, 昭和15年頃に戦争が激化すると, 御座敷は軍によって禁止されてしまう。ただし遊廓は残され, 善通寺の陸軍第二師団の兵隊達が日曜になると大勢やってきた。戦時中の新地遊廓の客は, 以前とは打って変わってこの兵隊ばかりであったという。しかしそれも昭和17~18年頃までで, 戦局がさらに悪化すると新地は静まり返ってしまった。

#### 4. 赤線時代の新地 (図2)

長らく続いた日本の公娼制度は, 戦後にGHQの指導を受けて廃止され, 遊廓地区は「赤線」と呼ばれるようになった。しかし, 呼び名が変わっても内容は殆ど変化せず, かつての遊女屋は警察の許可をもらった特殊飲食店の名で公然と売春行為を続けた。琴平の新地もその例外ではなかった。

琴平の町にも, 戦後徐々に活気が戻ってきた。まず, 戦前いったん廃止された芸者が琴平の町に再び登場する。昭和27年7月に, 全国の花柳界に先がけて「琴平技藝学校」が開校したのである。この学校を卒業した芸者達は, 戦後の琴平観光名物の一つとなった<sup>11)</sup>。

昭和30年代には, 琴平にあわせて5軒の映画館があったが, そのうち3軒 (希望館, 琴平松竹座, 日本館) が栄町に集まっていた。このことから, 当時栄町が琴平一の娯楽を提供する盛り場だったことがうかがえる。希望館は戦前からあった金陵

座を改名したものである。日本館は昭和28年に建設され, ダンスホールを併設していた。琴平松竹座は少し遅れて昭和31年に建設された。松竹座はナイトショー (深夜上映) が盛況であったという<sup>12)</sup>。この頃の思い出を, 当時を知る方がこう語ってくれた。

「夕方四時半くらいになると, 映画館が大音量でスピーカーからレコードの歌を流すんですね。これが今では考えられないほど大きな音で…。これは宣伝効果が大きかったですよ。ひとたび歌を聞いてしまうと, じゃ, 映画でも行くかって気分になってしまうんです…」

戦時中すべての娯楽が国策のもとに奪われていた人々は, 戦後, 映画に夢中になった。5軒の映画館はそれぞれ映画会社の系列が異なっていたため, 映画館のはしごをする人も少なくなかった。映画館が地元琴平の人々のための娯楽であったのに対し, 先述の芸者, そして新地の特殊飲食店は, 門前町ゆえの参詣客を相手とした施設であった。そのことを裏づける地元の方の証言がある。

「子供の頃は新地の中を歩いていっても全く相手にされなかったけれど, 戦後はハタチ超えてたからね。映画館行くのに新地通ると近道だったんで, 良く中を歩いていったけれど, たまに新人のねえさんに「兄さん遊んでいかんの〜?」って腕をつかまれたりしましたよ。それを見た

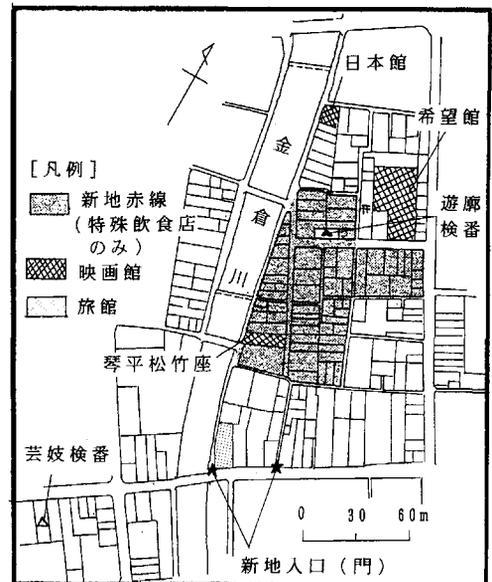


図2 赤線時代の栄町周辺

顔見知りのベテランさんが“これっ、あの人は地元の人だよ”と新人さんをたしなめているんです。声が聞こえてきちゃうんですよ。あの頃は道に女の人がいっぱい並んでいたよ。」

新地は一般の民家や旅館に隣接していたが、塀や柵に囲まれることはなかった。しかし、参詣客用に2カ所の入り口が設けてあり、そのうちの1カ所にはアーチが建てられ、「新地入口」と書かれた傘のついた電気がぶら下がっていた。そのアーチの支柱の一部はいまでも残る。新地内は盆と正月に特別に装飾された。

栄町の映画館の一つであった希望館（金陵座）のとなりに、遊廓のシンボルである稻荷神社があった。この稻荷は栄稻荷神社として現存している。毎年8月に栄町の有志で夏祭りが行なわれている。現在は露店が2、3軒出る程度でひっそりしているが、赤線当時は氷屋、果物屋、アイス屋など露店商が立ち並び、一番賑わっていたという。

このように琴平随一の盛り場として名を馳せていた新地も、売春防止法が全面実施される昭和33（1958）年の前年ごろから、次第に自主的な転廃業がふえていった<sup>9)</sup>。こうして琴平新地遊廓は、明治33年からの約60年の歴史に幕を閉じることになった。

### 5. 新地のその後（図3・4）

戦前から琴平を見つめ続けてきた地元の方によると、琴平の中でも一番変化が激しかった場所は、やはり新地ではないかという。

昭和30年代にあった5軒の映画館は、現在は一軒も残っていない。栄町の3軒の跡地も、現在は飲食店や駐車場となり、見る陰もない。昭和40年代前半にまず日本館が閉館し、続いて昭和45（1970）年頃に琴平松竹座、昭和46（1971）年に希望館が相次いで閉館した。これらは明らかにテレビの影響である。

同様に時代の流れと共に姿を消したものがもう一つある。戦後の観光客誘致事業で活躍した芸者は時代の推移とともに衰退し、昭和56（1981）年に検番も廃止された<sup>10)</sup>。

前述したように昭和33（1958）年に琴平新地遊廓の歴史は閉じたが、その後もその跡地はソーブランドやバー・スナックが散在する「夜の街」という性格を現在まで持ち続けている。30年以

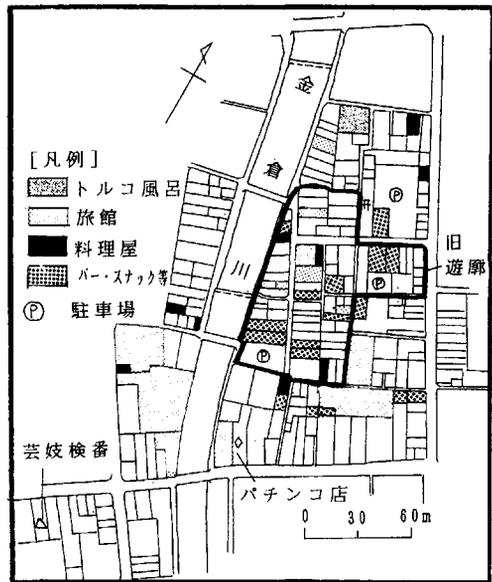


図3 昭和47年の栄町周辺  
ゼンリン住宅地図【仲多度郡】(1972)を基に作成

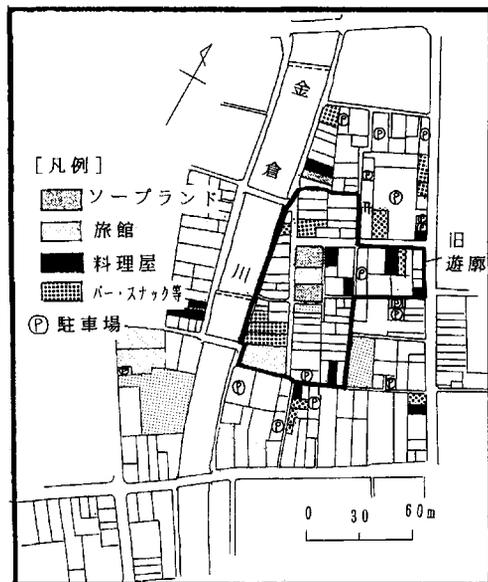


図4 現在の栄町周辺  
現地調査（平成12年）を基に作成

上前からこの地で営業を続けているスナックのママの話によると、赤線当時は参詣客が主だったが、現在は地元の常連客がほとんどであるという。栄町は、参詣客を相手にした門前町特有の賑やかな

色街から、赤線廃止後徐々に、地元の人に利用されるこじんまりとした小盛り場へと変遷していったのである。

## 6. おわりに

近年、琴平の観光客は「瀬戸大橋観光のついで」などの消極的理由で訪れる人が多く、昭和63(1988)年の調査では、「琴平に全く宿泊しない」と答えた観光客は全体の76%を占めている<sup>11)</sup>。しかし、平成9(1997)年に温泉が確認され、現在「こんびら温泉郷」として新たに観光開発事業が推進されている。琴平町役場観光商工課の西谷氏によると、「こんびら温泉郷」の名を広げるために平成12(2000)年、県やJTBなどとタイアップして第一回温泉祭りが開催され、反響を呼んだそうである。今後琴平に温泉目的で宿泊する観光客が増加する日も遠くないかもしれない。

また、門前町の振興策として、例えば表参道を石畳の道に整備するなどの措置は既に実行されているが、門前町の衰退を防ぐためには町全体の活性化が必要なので、薄暗い新町のアーケードを明るくし、観光客も入りたくなるような魅力ある商店街にするなどの構想が現在練られている。

## 謝辞

現地調査および文献調査においてご協力いただいた、ことぶき旅館の高橋さん、琴平町役場観光商工課の西谷さん、琴平町役場教育委員会の皆さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 注・文献

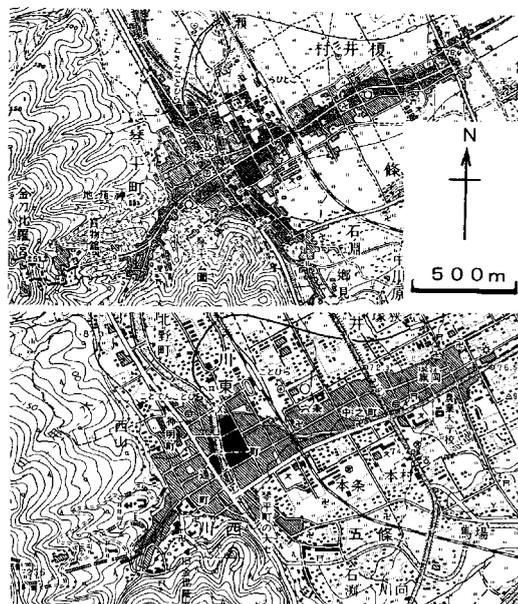
- 1) 服部銚二郎(1981):『盛り場 人間欲望の原点』, 鹿島出版会, 18.
- 2) 『香川新報』明治32年11月11日所収。「遊廓移轉の件…琴平町の遊廓が神明町其他普通商家旅亭の間に在り風俗上有害なるより明月三月末限り移轉す可き…(後略)」
- 3) 合田丁字路(1983):『こんびら夜咄』, ことひら, 38, 152~154.
- 4) 合田勉之(1992):『観光客の知らない琴平の町・五十年振りにみる裏町や路地』, ことひら, 47, 48~51.
- 5) 琴平町史編集委員会(1998):『町史ことひら3 近

世近代・現代通史編』琴平町, 641~642.

- 6) 琴平町史編集委員会(1997):『町史ことひら4 民俗・史跡・碑・文化財・人物編』琴平町, 176~177.
- 7) 前掲5) 701~702.
- 8) 前掲6) 176~177.
- 9) 因藤泉石(1995):『“こんびら”遊廓覚書「売春防止法施行」一で消えた赤線地帯』, ことひら, 50, 20~29.
- 10) 前掲5) 701~702.
- 11) 坂口良昭・近藤明子・鈴木康子・松井真紀(1989):『琴平町の観光地理』, 地理学研究, 第38号, 10~23.

まえしま・ひろみ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科  
発達社会科学専攻・地理環境学コース



## 付 図

- (上) 地理調査所発行  
25,000分の1『普通寺』  
1928年 修正測図  
1932年 鉄道補入
- (下) 国土地理院  
1997年発行  
黒塗り部分が図1~4の範囲